
魔法少女リリカルなのはViVid -特攻四課ラジカルフォース-

十六夜夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはViViD - 特攻四課ラジカルフォース -

【NNコード】

N2844BA

【作者名】

十六夜夜

【あらすじ】

彼らは復讐のために集まり、4年前に機動六課に敗れてその身を保護された。これは、そんな4人が平和な世界を過ごしていく物語。

キャラ紹介（前書き）

初めまして、十六夜夜です。あまりいい作品とは自身では思えませんので、皆さまの退屈しきになれば良いな、と思つております。

キャラ紹介

アルスター

年齢：17歳

魔道師ランク：C

所持デバイス：ブリューナク ダブルストップ and????

レアスキル：独立回路

魔力光：紅

詳細：

特攻四課のリーダー。性格は多少大雑把だが、他人の気持ちを理解する事が出来る。
頭で考える事が苦手。

スルマ

年齢：17歳

魔道師ランクA-

所持デバイス：グラディウス ブレイブレイカ and????

レアスキル：四肢思考

魔力光：橙

詳細：

特攻四課の副隊長。性格は荒く、頭はあまり良くない。
フェイトに惚れしており、日々アプローチしている。

コード

年齢：16歳

魔道師ランク：E

所持デバイス：ゾディアック プラッドベア and????

レアスキル：戯言論破

魔力光：蒼

詳細：

特攻四課の策士。朗らかな性格で、誰に対しても優しい。
4年前、なのはによつて右目を失つてゐる。

ハティル

年齢：16歳

魔道師ランク：B

所持デバイス：マーナガルム and ???

レアスキル：シズルポイント幼女礼讃

魔力光：紫

詳細：

特攻四課の傭兵。冷静な性格で、冗談が通じない。
ロリコン。幼女を見るとテンションが上がる。

プロローグ（前書き）

更新が遅れると思います。そしてその割には短かたりします。

プロローグ

「これが…これが、そうなのか」

「そう。セカンドジェネレーションストレージデバイス。略して2GSDと僕は呼んでいます」

コードがアタッシュケースを開けると、色違いのPDSが縦に4つ並べられていた。

紅、蒼、橙、紫、それぞれ美しい煌めきを放っている。そんなPDSをアルスターはうつとりとした表情で眺めていた。

長かった。

ただ一つの復讐のために、今日の今日まで管理局の手を逃れながら傭兵として過ごしてきた。

何人の人を殺してきただろう。

男、女、子供、難民、軍人、博士、サラリーマン、消防士、警察官、家政婦、作家、大学生、高校生、中学生、小学生、幼稚園児、保育園児、教師　　駄目だ、とても数え切れない。

幾つもの死線を乗り越えながら生き長らえた。その中で、同士を二人集めた。

全員難癖があるとはいっても、一つの志の下に集まつた同士だ。例えるなら、「家族」と行つても過言ではない。それは断言できる。

「従来のストレージデバイスとは違い、使用者の意志と呼応する事によつてもともとの性能以上の力を引き出す事が可能になりました。管制デバイスとしての機能も備えていますので、使い勝手は良いものになると思います」

「分かつた。悪いが、スルマとハティルを呼んできてくれないか?」

「承知しました」

領いたコードは背中を向けてその場を去る。

「… やで」

再び2GSDに視線を移す。

紅は『紅蓮の焰を内蔵した』デバイス、ブリューナク。
蒼は『一一の星を内蔵した』デバイス、ゾディアック。
橙は『戦いの神を内蔵した』デバイス、グラディウス。
紫は『月蝕の狼を内蔵した』デバイス、マーナガルム。

どれも性能の高いデバイスばかりだ。後は使用者の技量次第だが、それは問題あるまい。

人生が殺し合いの戦闘経験と比喩出来るほど、戦いに、殺害に明け暮れる毎日だったのだから。

ああ、いよいよ始まるのだ。

アルスターは指で2GSDをなぞる。

俺達を見限つた管理局の首を、この手で引きちぎつてやるんだ。

＝＝＝＝＝四年後＝＝＝＝＝

「ス～～～～～テ～～～～～キ～～～～～ツ！～！」

6月の黎明、とある家で奇声にも似た寝言を叫んだのはスルマだつた。

何か良い夢でも見ているのだろう、嬉しさからか身体をガバッと起こす。

「フロイトさんソニツクフォームヤベえ！！凜々しそぎだろ！スタ
イル良すぎー！」

あ、ヤバイッ！また人生振り返ってるぞオイ！ちょっと待って、走馬灯ぞ？二回。走馬灯。

あれ？でも確かに俺達って一度死んだんじゃ……死んでるのに死ぬつ

アホ、アホだい！？

e e e e e e e e e e - !

スルマにも負けない怒声を巻き舌で上げたのは特攻四課のリーダーであるアルスターだつた。起きると同時に投げつけた枕は見事、スルマの顔に命中する。

ぐおつ、と唸つたスルマはベッドへと倒れ、再び鼾レフをかき始めた。
寝癖が悪い奴だ。

アルスターが深い眠りに入ろうとした時だつた。

「なーに、お兄ちゃん? すゞい声が聞こえたけど……」

扉から軋む音が聞こえたと同時に、部屋に入ってきたのはパジャマを着たヴィヴィオだつた。彼女は右目に緑色、左目に赤色を宿している。いわゆるオッドアイだ。

「いやいや、気にしなくて良いぞヴィヴィオ。スルマが馬鹿な寝言をほざいただけだ」

眠たそうな眼を擦りながら欠伸したヴィヴィオ。
アルスターは何処となく申し訳ない気分になった。

「分かつた…もうひと眠りするね」

「ああ、悪いな」

後でスルマにアイアンクロードも決めるでしょう。それで許してくれ、ヴィヴィオ。

そんな事を思いながら、アルスターは両手を合わせるのだった。

「ううん、大丈夫…はふう」

ヴィヴィオはそう言って部屋から出ていった。
暫しの沈黙。

両腕を組んで考える。

「……何やつてんだろうな、俺は」

結局、復讐は失敗に終わった。
ジェイル・スカリエッティと手を組んだというのに、機動六課の前に敗れる事になった。
彼らに分はあつた。

ハティルはエース・オブ・エースであるなのはの攻撃を全て喰らわず、コードは見事な戦術でフェイトに白兵戦で勝利、スルマは怪力で機動六課本部に乗り込み、アルスターはヴィヴィオをさらう事に成功。

それなのに 負けたのだ。

敗因は、4人全員が魔道師を相手に戦つた事が皆無だったという事。

まだ彼らが年齢的にも精神的にも、そして魔道師としても幼すぎた事。

「人の思い」という有耶無耶極まりない原理が、魔道師達を復活させた事。

結果、彼らは逮捕され、何人かのナンバーズと共に海上隔離施設に保護される事となつた。

一見すればジエイル・スカリエッティを裏切つたと思えるが、当初は、4人は後に新たな反逆を起こすための「その場しのぎ」でしかなかつたのである。

どんな拷問にも耐えてきた4人だ。更生プログラムなどへっちゃらだろう。

しかし今は、この平和な世界で彼らは過ごしている。
それも、何の疑問も持たずに。

アルスターとスルマはなのは達の家に同居する事になり、コードはハ神家で居候として過ごし、ハティルは聖王協会に保護された。ヴィヴィオやその友人であるリオやコロナも、4人を慕ってくれている。

不満なんてない日常だ。

もう誰も反逆を起こす気などなかつた。

更生プログラムは全くと言つていよいほど効果はなかつた。

彼らを変化させたものがあるとすれば

「…寝よう」

再び身体をベッドに預け、眠りに入る。

今はまだ、この世界に満足している。もつと早く彼女達に出会つていれば、世界を恨んだこともあつた。だが、過ぎた事は過ぎた事だ。残りの人生を思い切り楽しめば良い。

凝つてこるオムライス／FGSD（前編）

正式に第一話です。

「おせちりんごを二種類」

はい。2人ともおはよう。朝はオムライスだよ。

一度寝した後に起きると一度なのはが朝、「はんを作っている時間だつた。

ヴィヴィオは既に魔法学院初等科の制服に着替えていた。

「おおすげえ、ケチャップでVivio 4thって書かれてるぞ
「それにヴィヴィオの顔まで…凝つてんなあ。…つーかスルマのオ
ムライスでかくね？」

「まあ、俺は食欲が旺盛だからよ」

椅子に座り、両手を合わせて「いただきます」とお辞儀する2人。オムライスの端をスプーンですくい、口に入れると、

「おおむね一・二ヶ月で一・二回」

「でえつ。」**「飯粒飛ばすなよ、馬鹿」**

まるで獣のようにオムライスを喰い尽くしていくスルマ。そんな光景を見て、なのはとヴィヴィオは笑った。

「じゃあお兄ちゃん達、わたし学校に行つてくるからね」

スルマの耳にそれは届いていなかつた。

まるで呼吸するかのようにスルマはオムライスにがつづいていた。

「おひ。今日は始業式だけなんだろ」

「帰りに寄り道するけどねー。いつきまーす！」

「おう、氣をつけてな」

「ヴィヴィオ。今日はママも早く帰つてこられるから、晩御飯は四年生進級のお祝いモードにしようか？」

「つおつー！それ賛成！大賛成！」

「晩御飯」に反応したのだろう。ここぞとばかりにスルマが反応した。

そんなスルマの頭をアルスターは巨大なオムライスの中に沈める。両手を振り回しながら悶えるスルマだが、やがて動きが止まる。その背後ではヴィヴィオとなのはがハイタッチしていた。ヴィヴィオはそのまま玄関へと出ていった。

「ねえ、2人とも今日は…って」

なのはの視線はオムライスの中に沈んでいるスルマに向かっていた。

「気にしないでくれ、なのはさん。で、何ですか？」

視線をアルスターに移すなのは。

「さ、今日は2人何か予定あるのかなって思つて。なかつたらヴィヴィオの迎えを頼みたいんだ」

「良いですよ」

「うん、ありがとう」

本当の事を言えれば聖王教会に行つてハティルの顔でも見てやるうと思つていたが、なのはとロリコン野郎を天秤に掛ければ重いのは前者の方だ。

＝＝＝＝聖王教会カリム・グラシア執務室＝＝＝＝

「ハ――ツクツショ――ンツ――！」

「大丈夫、ハティル？ 風邪でもひいたのかしら」

「お構いなく。死人は風邪をひきませんから。どうせアルスターが私の事を「ロリコン野郎」とでも噂しているのでしよう」

（自覚はあるのね…）

ハティルは右の脇に挟んでいた書類を机の上に置いた。

「これがFGSD ファーストジェネレーションストレージデバイス における事件の資料です。それと…フフツ」

その笑いにカリムは嫌なを感じた。

ハティルが口に右手を当てて笑う時は、大抵が口クな事じやないのだ。

そのカリムの予想は、見事的中した。

ハティルは黒いフード付き神父服の懐から一通の手紙を取り出す。そして静かに手紙を黙読した。

「こんなものが今朝届いていました。

「インターネット・チャンピオンシップ会場の爆破テロ予告です
ね」

「…え？」

「インターネット・チャンピオンシップ会場の爆破テロ予告ですね。インターネット・チャンピオンシップ会場の爆破テロ予告ですね。大事なことなので一回言いました」

その呑気な言い草にカリムは呆れてしまう。

仮にも彼は聖王教会の神父なのだ。もうすこしこういう物事には眞剣になるべきなのではなかろうか。

「こひのうのは大変許すまじ事。10代の子供達を狙う爆破テロなど言語道断、信じられませんね。騎士カリム、この1件の事は、このハティルに任せて頂けませんでしょうか？全責任は私が取ります」

（あら？割と真剣ね。もしかしたら、私はこの子の事を勘違いしていたのかもしれないわね。そうよ、あれから4年も経つていてるんだもの）

「どうせ殺すなら、もうちょっと歳をとった女性にしてほしいですね」

「今、あなたの事を尊敬してたんだけど、幻滅したわ」

下を向いて溜息をつくカリム。

やはりハティルはハティルである。

4年経とうが10年経とうが彼は永遠のロリコンなのだろう。ヴィヴィオが教会に来る口は、何故かハティルの起床時間は早い。「ちよっと待つて。なんでそんな手紙が聖王教会に来たのかしら? 普通、時空管理局とかに届けるべきじゃないの? それに、これがただのイタズラとこいつ事も考えられないかしら」

「……」

きょとんとした目でカリムを見つめるハティル。

どうらかとくと馬鹿にしたような目だ。

まるで、「お嬢様の目は節穴でござりますか?」と今にも口に出了そうだった。

「……騎士カリム。この手紙を、私は一度拝見しています。そのうえで、報告しに來たのです。一応読ませていただきますよ。

『果たし状

ボルトライ

死人偽賊に告ぐ。……ああ、今は特攻四課だつたか。

お前らは俺達の事を知らないかもしれないが、俺達はよく知っているぞ。裏じゃ少し有名なんだよ。

ジェイル・スカリエッティと組んだくせに、機動六課に負けたヘボ

傭兵軍団つてな。

情けないな。そんなお前らにFGSDは相応しくない。それどころか、生きている価値すらもない。

俺達の持っているFGSDで、お前らの全てを叩き潰してやる。まずは、インター・ミドル・チャンピオンシップ会場を爆破。時間は地区選考会当日。

それから、お近づきの印として良いものをやるよ。そんじやあ末長く楽しみな。

ちなみに、この事を管理局に伝えたら……まあ、後のお楽しみだな。
シズルポイント
幼女礼讃。お前さえ良けりや、コツチに来ないか？
ボルトライ
ボルトライ
死人偽賊なんて組織にはもつたいねえぜ。

死人偽賊
アンチキーブ
四肢刹那のリーダー・カリフィスより』

「カリフィスですって！？」

「ええ、しかもFGSDを持つていると。イタズラ好きな裏の住人など存在しませんよ。それに、一般人がカリフィスの名を知る筈がない」

カリフィス。

その名は表向きの世界では一切知られていないが、裏ではかなり危険視されている魔道師である。

管理局魔道師の多数の殺害、薬物の使用と輸送、同時多発テロ。かつては地球にも足を運んだ事があるとか。

「タイミングが良すぎるのです。私達がFGSD事件の調査をしている時に、カリフィスからの挑戦状。恐らく、ここ数年のFGSDによる事件は……」

「カリフィスが関連している」

「……はい」

ハティルの言葉を先取りするカリム。

「あなたはさつき、「この一件は任せてしまい」と言いましたが、既に策は考えているのですか?」

「ああ、それなら…」

「はーいはーい!そこから先は私が御説明させていただきます」

ハティルの左の空間から声が聞こえる。

透明な何かが動いたかと思うと、四肢を最初として実体化していく。「シックロリータの服を着た、16歳くらいの少女だった。

「あら、あなたは…」

「はい、イアーレンヴィーズの無名の狼の一人にいました。名は名無しと申します。実は既に100匹の狼がこのミッドチルダでそれがFGSDにおいて別ルートで調べているのでいます。そして分かつたのでございます」

一切の区切りをつけず、早口で話す少女。

「…何かしら?」

「FGSDは四肢剝離^{アンチキープ}によつてミッドチルダで一般人に密売されていゐるのでございます」

「…ツ…嘘…!」

口ではそう言つたが、カリムには思い当たる節があつた。

FGSDを使用した容疑者を全て調べ上げても、カリフィスまでには辿り着かなかつた。

それは、四肢刹那アンチキープの者ではなく、正真正銘のただの一般人だつたのだ。

FGSD及び2GSDとは、魔力資質の低い者が、高ランクの魔道師と互角に戦うために作られたドーピング薬のようなものである。金額の問題さえなれば、誰もが手にいる事が出来る代物なのだ。

「それに対策をと言われましても考え方ません。だつて相手が一般人なんですから」

小馬鹿にしたような言い方だつた。

「……では、どうするのかしら?」

「FGSDを持つている一般人が、それを使用するのを止めさせればいいのです」

静かな声で言い放つたのはハティルだつた。

「一番大事なところ言いやがつて」と名無しはハティルを睨み、舌打ちした。

その様子はどこか愛嬌がある。

「そのためのイアールンヴィズ……無名の狼達です。彼女達の人脈は測り知れません」

「…他の三人には、この事を伝えるのかしら?」

「アルスターとスルマには、伝えようと思つています。コードには、伝えようにも出来ませんので」

「分かりました。では…」この事件の一切の責任はあなたにお任せします。？双蝕の狼？ハティル」

「承知しました。騎士カリム」

深々とお辞儀して踵を返そうとするハティル。
そんな彼の背中に、カリムは溜息をつきながら最後の質問を投げかけた。

「FGSDとは、一体どんなもののかしらね」

「……一般的なストレージデバイスは、あらかじめ魔法を詰め込んでおく記憶媒体でしかありませんが、FGSD及び2GSDは、伝承や神話の記憶そのものですよ、恐らく」

背を向けたまま、彼はクスリと笑つ。

名無しの少女も、その背に続いて部屋から出て言つた。

「それでは騎士カリム。ご縁がありましたら今度お茶でも

「ええ、そうね」

カリムの問いに、名無しはただ微笑して部屋から出ていった。
入れ違いに入つて来たのはシャツハ・ヌエラだった。

「どうでしたか、騎士カリム」

表情一つ崩さずに尋ねるシャツハ。

カリムが落ち込んでいる様子を見ると、あまりいい報告ではなさそうなのは分かっている。

「あまり良いものではないわね…。結局、あの4人に辛い思いをさせてしまうかもしれないわ」

「そうですか。でも、大丈夫ですよ。ハティルは一応聖王教会の神父ですから」

「…そうね。じゃあ、シャツハを信じる事にするわ」

「ええ

その時、一通のメールが届いた。

それには、ヴィヴィオとその親友であるリオとコロナが仲良くなっていた。

後ろにはアルスターとスルマの姿も確認出来る。

何故かスルマの顔にはケチャップがついていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2844ba/>

魔法少女リリカルなのはViVid -特攻四課ラジカルフォース-
2012年1月10日16時48分発行